

蜷川 順子監修／『風のイメージ世界』
刊行実行委員会編

風のイメージ世界

みることができないイメージを、芸術は色や形対する必然だったのかも表現しようとしてき

しれない。

た。みえないものとの交信媒体のひとつが「風」というモチーフである。神仏や宇宙、自然、科学と人間との関係は、固定化されることのないイメージのダイナミズムである。この動的 세계觀を、芸術における「風の表

象」を通じて多角的に現すもので、ヘブライ語の「ルーアハ」に相当する。素晴らしい。本書は「口ナ禍（2022年）に開催された国際シンポジウム「風のイメージ世界」の予稿集を発展させたものである。この時期の我々は、命にかかる空気の動きを常に想起していた。本書の登場は、「みえないものの可視化・言

描かれている。この音を

感じない不思議な風は、蜷川順子がとりあげたキリストの磔刑における腰布や天使の衣にも見受けられる。蜷川は、「神意をもたらず霊は本来氣息だったとする認識を、風に翻る布として案出した」という。倉持充希はキリストの受難と贖いを示唆する風に注目

家にとって芸術的課題であつたと指摘した。信仰の中にある風は恐ろしく

厳粛で、一瞬でありなが

における風は、対象に内在する「氣」を観る者に感じさせる表現（風動表現）として機能すると長

近代美術について、富

は、ターナーが機械文明へと暴走する人間への黙示録として自然の偉大さを描いたと分析している。ソムヘギ・ゾルタンの論考は、この自然の力の顕現としての「崇高さ」への関心が、次第に都市へと向かう過程を追う。

モチーフは「生きている身体」の存在を巻き込むものになりうるかどうかを問う機会を与える」というイオネスクの視点は面白い。本書で唯一の実践者となるハシブ・アフマドは、自らのアートプロジェクト〈風・卵〉について説明している。古代ギリシャでは、ハゲワシが風の神アイオロスと結びられて再生する風媒動物と考えられていた。この神話と、科学的な風の再現やサウンドデザインを組み合わせて、風における受精と繁殖のイメージを作品に具現化している。現代アートにおける風もまた、目にみえない存在や命と交信する場にある。

視覚と触覚を行き来しながら、神仏や宇宙、人間存在、命など目にみえないものを「現存」へと

「関西大学名誉教授・西洋美術史。近年の研究対象は、初期ネーデルラント美術・キリスト教図像学・風景表象・建築と色彩。著書に『聖心のイコノロジー』『祈りの形にみる西洋近世』など。

芸術の始原としての力

目にみえないものを「現存」へと軽やかに変換する

知足 美加子



A5判・276頁・4400円
三元社
978-4-88303-578-6
TEL. 03-5803-4155

し、重層的な意味と形態をもちうるフネウマを視覚化することは、宗教画

ら「永遠を感じさせるものである。一方、東洋の仏教美術

に、第四の壁を超えて風

岡龍作は述べている。仏の験としての風は、人間からの働きかけに超越者が応えるもの（感応）である。彼は仏像に関して「素材と動きが、見えない存在と人間との間を媒介する」という。苦悩する人々と仏の救いの間に、第四の壁を超えて風

岡進一は「怒り、風を求めた」というターナーの風、嵐、蒸気の表象をとりあげ、そこに産業革命に潜む人間の本性（非理性的、非人道的な情念）を見出している。富岡

現代アートの中で、フ

が風の神アイオロスと結びられて再生する風媒動物と

ないものを「現存」へと

「関西大学名誉教授・西洋美術史。近年の研究対象は、初期ネーデルラント美術・キリスト教図像学・風景表象・建築と色彩。著書に『聖心のイコノロジー』『祈りの形にみる西洋近世』など。